

物は苦手の上、通関の都合で現物は持ち帰れないので学名をメモして貰ってきた」とノートを見せてくれた。

それには細満江紅 *Azolla filiculoides* Lam. とあった。文献にあたってみると南米、フランス、イタリアに分布して1977から中国の農村に導入されたものらしい。私はアメリカ、ドイツ、チェコスロバキア等に分布するアメリカアカウキクサ *A. caroliniana* Willd. とか中国に産するアカウキクサ *A. imbricata* (Roxb.) Nakai 即ち「細満江紅」などの利用はしていないのだろうかと尋ねたが、中国では前者のことばかり話していたのでアメリカアカウキクサやアカウキクサは利用していないのではないかと思うとの答えであった。

本年も4月に杭州に行くのもう一度確かめると約束してくれた。

アカウキクサ科は世界で1属6種が暖帯、亜熱帯、熱帯にかけて広く分布するというが、それらの中には浮水葉の同化組織が発達し、葉に穴があって藍藻類の一種 *Anabaena* が共生していて空気中の遊離窒素を固定することが知られているのでそれを活用したものであろうが面白いことである。

或いは日本でもすでにこの利用をしているところがあるのかどうか知らないが、熱帯魚の飼育の盛んな日本では外国産の *Azolla* が相当入っていると考えられるので将来面白い結果がもたらされるだろうと思う。

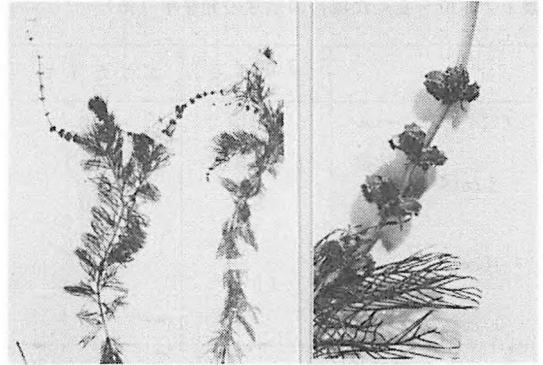
尚小畑氏は杭州にはトゲのない大きな果実のヒシが沢山あったこともつけ加えてくれた。顔素珠氏編著の中国水生高等植物図説によっても中国のヒシ11種が記載されているが、トゲのないヒシについては載っていないので本年も杭州に渡る小畑氏にこのヒシの写真だけでも入手してほしいと依頼をしておいた。会員諸氏で本種についての知見のある方の御教示をお待ちしている。

(1985. 1. 10.)

淡路島にトゲホザキノフサモ

角野康郎

トゲホザキノフサモ(別名ハリミホザキノフサモ)は、果実(分果)の背面の縁辺に硬い小突起をもつもので、ホザキノフサモの変種とされる。北海道と本州に分布する稀な植物とされるが、具体的な産地の所在については、一部の地方植物誌に記録があるものの、ほとんど知られていない。いずれ標本にあたって全国的な分布を明らかにしたいと思っているが、今回は淡路島で採集したトゲ



〔写真〕淡路島のトゲホザキノフサモとその果実(右)

ホザキノフサモを報告しておこう。

昨年(1984)10月10日、淡路島のため池を調査した際、南淡町鳥取の海岸の近くにある池でこのトゲホザキノフサモを見つけた。花はほぼ終り、たくさんの果実をつけて群生していた。果実背面の突起は肉眼でもすぐわかり、これがトゲホザキノフサモかと初めての出会いに興奮したものだ。持ち帰って詳しく調べたところ、この標本(写真)では、分果の両縁に小突起が並ぶというよりも(これは、通常のホザキノフサモでも多かれ少なかれ認められる特徴である)、両縁全体が盛り上って稜となり、その上に突起(起伏)が見られる状態であった。

池は富栄養化が進んでアオコが浮いており、電気伝導度2100 $\mu\text{S}/\text{cm}$ 、塩素イオン508 mg/l 、明らかに海水の影響下にある池である。

冬期の水位低下がササバモと

コウガイモの殖芽に及ぼす影響

角野康郎

湖沼やため池の水位低下は、そこに生活する水生植物にさまざまな影響を与える。その影響は植物にとどまらず、それと結びついた魚や昆虫、鳥類にも及ぶため自然保護の観点から重大な関心がもたれる。一方、その影響の大きさ故に、水生雑草の防除手段として水位低下を利用する場合もある。最近では、人間の開発行為によって今までになかった大規模な水位変動がもたらされる例も出てきており、それだけ水生植物が深刻な影響を受ける状況もふえてきていると言えよう。

水位低下は、そのおこる時期や期間、その程度によって与える影響は異なるし、また生物の種類によって受ける影響は異なる。浜島(1982)はため池の渇水が水草